亀井孝と国語入試問題（上）

西村　準吉

一　はじめに

国語学者・言語学者として知られた亀井孝（一九一二～一九九五）は、昭和五十一年（一九七六）から五十八年（一九八三）まで成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科で教授を務めたが、それ以前は長い間一橋大学の社会学部で教鞭を執っていた。阪田雪子編「亀井　孝年譜および著述目録」（『国語学』百八十一集　平成七年（一九九五）・六）によれば昭和十四年（一九三九）に一橋大学の前身である東京商科大学の非常勤講師になってから成城大学着任直前まで、途中海外研修に出ている期間も含めれば三十七年もの間一貫して一橋大学に籍を置いていた。亀井は若かりし日、東大国語研究室において橋本進吉の高弟として同時代の俊英と切磋琢磨の日々を送った。その後、同研究室の助手を経て昭和二十四年（一九四九）に一橋大学助教授に就任し、以来、国語学と言語学を自在に往還しながら実に半世紀にわたって学界を牽引してきた。その学識について述べることは筆者の手に余るので、佐竹昭広による評を借りたい。

先生の論文は、微に入り細をうがつ文献的検証と、古今東西にわたる博大な学識を踏まえてあくまで緻密な理詰めの思弁とが渾然一体を成している。検証と思索の跡、洞察の行くえを見失うことなく辿ろうとして、時を隔て、再読三読してもなお、行間を読み得ず、理解力の不足を長歎させられる。

（『言語文化くさぐさ　亀井孝論文集5』序　昭和六十一

年（一九八六）八月　吉川弘文館）

亀井は長く学界の中心にあって比類なき博識と多言語を駆使した他を寄せ付けない圧倒的な研究業績がありながら、斯界の重鎮のような立場に置かれることを潔しとしなかった。自身がアカデミズムの本流の「圏外」にあることをコウモリに見立て、コウモリを逆さにもじった「李莽古（湖）」としばしば自称していた。小松英雄「李莽古先生追慕記」（『国語学』前掲号）にも、

国語学界で亀井孝といえば、早くから泣く子も黙る存在であった。しかし、彼の論文は名声に比例するほどには引用されていない。敬して遠ざけられてきた、ということであろう。

とあるように、その論文の難解さと晦渋な文体は同業研究者から敬遠され、当時から正当に評価されていなかったという側面もある。

亀井孝の学問的業績については前掲の年譜に詳しいが、国語教育についての論考は見当たらない。一橋大学は文学部のない大学だったことも関係しているのか、『概説文語文法』（昭和三十二年（一九五七）吉川弘文館　二〇一七年「ちくま学芸文庫」で復刊）、『新編文語文法』という文法の参考書が残る程度である。また、『日本語の歴史1～7』（昭和三十八年（一九六三）平凡社、二〇〇六年「平凡社ライブラリー」で復刊）のシリーズは日本語史の金字塔とも言うべき大著で、亀井孝、大藤時彦、山田俊雄の編集委員に加えて河野六郎、池上禎造、築島裕など錚々たる執筆陣を連ねているが、全編を通して亀井がリライトして成ったとされている。しかしながらこれも一般向けに書かれたという体裁で、内容的にも国語教育に言及した箇所はない。

ところが、亀井の作成した大学入試問題国語についてはしばしば話題に上ることがあり、そこに教育者・亀井孝のかすかな痕跡を確認することができる。当時の一橋大学の国語入試問題は難問で定評があり、大学入試の過去問集の定番『全国大学入試問題正解』（昭和三十三年度（一九五八）旺文社）の「一橋大傾向概観」からもその難問奇問ぶりが定着していたことが分かる。

例年に変わらず、設問の意味の取りにくい問題で、出典といい、出題方法といい、ひとひねりひねった風変わりなものが多い。ともかくいつも意表外な問題だから予測ははなはだ困難である。いずれにしても応用のきく基礎力を活用して、よほど腰をおちつけてじっくり考えないと、解

けない難問ばかりであるから、平素の構えが肝要である。

亀井と入試問題については大学受験界のみならず、親しい間柄の研究者からの証言も時折見かけることがある。よく知られているのは、小島幸枝『圏外の精神―ユマニスト亀井孝の物語―』（平成十一年（一九九九）武蔵野書院）で、大学入試問題と亀井孝についてのエピソードが詳しく語られている。また、亀井を師とする言語学者で元一橋大学教授の田中克彦の自伝には具体的で臨場感溢れる回想が記されている。

先生の入試問題作成はたいへんなもので、一〇か月も前から、これに熱中されていた。書斎の片隅に胸の辺りまでの高さまで文献が積んであるのを指さして、この中から出すんだよとおっしゃった。ぼくは印刷されたものの中からは出さないんだよと。

そして現代文は、ご自身が作られた文章を出題するんだよとおっしゃった。

（『田中克彦自伝　あの時代、あの人びと』平成二十八年（二〇一六）平凡社）

大学入試国語の素材文を出題者が書き下ろすというのはきわめて珍しいことである。入試英語の場合は使用語彙や文法的な破格を調整しなければならないこともあり、書き下ろしやネイティブ教員による大幅なリライトが行われることもあるが、国語においては適切な文章を素材として選定し、必要に応じて分量を調整して出題するのが一般的である。また、入試問題作成は秘匿性が高く、原則として出題者が公表されることはない。そもそも作問については複数の教員がチームで作成することが通例であるため、個人が単独で作成にあたるということも現在では考えられない。大学入試センター（現大学入学共通テスト）においても、出題者は二年交替で任期終了後数年経過してから官報にその名が記載される。作問にあたっては大問ごとの分科会が編成されているというが、誰がどの問題を担当したのかは公表されない。多くの大学の入試においても事情は似たようなものであろう。個人による単独出題がない以上、大学や学部ごとの「傾向」のようなものはあっても特定の教員の思想や信念が反映されることはほとんどないと言ってよい。ところが前述の通り一橋大学は文学部がなく、いわゆる「国語」に通じた研究者が存在しない環境ということもあって、作問はある時期までほとんど亀井一人が行っていたと考えられる。「一橋国語といえば亀井孝」というのは研究者の間でも受験生[1]の間でもよく知られたことだった。田中克彦の証言はそれを裏付けるものである。

他ならぬ亀井自身が自著の中で入試の作問意図に直接言及したこともある。

昭和三十一年度（一九五六）大問二

（ロ）左に掲げるのは、「世には心得ぬ事の多きなり。何事にも、まづ酒をすゝめて強ひ飲ませたるを興ずる事、いかなる故とも心得ず。」をもつてはじまる、「つれづれぐさ」第百七十五段の中の一節であるが、本文に異同がある。いま、二つの本文を並べて示すと、次のとおりである。

□甲本の本文

あくる日まで頭いたく、物くはずによひふし、生をへだてたるやうにして、昨日の事覚えず、おほやけわたくしの大事をかきてわづらひとなる、人をしてかゝる目を見する事、慈悲もなく、礼儀にそむけり。

□乙本の本文

あくる日まで頭いたく、物くはずよひふし、生をへだてたるやうにして、昨日の事覚えず、おほやけわたくしの大事をかきてわづらひとなる、人をしてかゝる目を見する事、慈悲もなく、礼儀にそむけり。

あやまりと思う方の本文の上の□の中に×印を書きいれ、つぎに、×印をつけた本文が許されない根拠を簡明に記せ。（字数は二十字前後を可とする）

この問題は、一般的に「によび臥す」と読まれていた「によふ」（苦しがってうなる）という古語についての高度な「ひっかけ問題」であるが、亀井自身、

ところで、じつは、すこしいたずらのすぎたきらいはあるが、数年まえ、わたしは、つとめさきの大学の入学試験に、このところをこのような形で出題し、「物くはずゑひふし」とうけとりはしないかどうかをためしたことがある。（「酔ひ」だったら兼好の時代としては「ゑひ」の形を期待すべきなのである。）試験のあと、受験屋は、この出題について、当該の個所に濁点のないのは根拠あってのことだろうと当惑したようなことを書いていたようである。

（「行動半径」『ことばの森』吉川弘文館所収　初出『學鐙』五十五・十　昭和三十三年（一九五八））

と自ら狙いを証言している。現在であればコンプライアンス違反を問われそうな書きぶりであるが、大学入試において出

題者個人が意図を解説するという珍しい一幕であると同時に、「受験屋は」[2]のくだりから、亀井自身が『全国大学入試問題正解』などを通して自らの出題についての反響を意識していたことも見て取れる。

大学入試古文において、古典作品の本文異同について出題されるというのは当時としても異例中の異例であり、自らの関心や研究内容との接点になるような作問という点では亀井の作問姿勢が表れていると言ってもよい。しかしながら亀井自身、一貫した作問方針に沿った出題をしていたというわけではなく、三十年にも及ぶ一橋大学の入試問題作成において、いくたびかの変遷、あるいは逡巡のような、きわめて人間的な試行錯誤の跡を指摘することができる。出題文の素材や問題のあり方から読み取れる大きな傾向として、私に以下の一～三期に分類し、本稿では特に第二期について考察を試みたい。入試制度の変遷や学習指導要領の改訂という外的な事情の影響、あるいは亀井の国外研修による不在期間がどうであったかという問題については本稿ではいったん措くこととする。

第一期　昭和二十五年（一九五〇）～昭和三十年（一九五五）
第二期　昭和三十一年（一九五六）～昭和三十八年（一九六三）
第三期　昭和三十九年（一九六四）～昭和五十一年（一九七六）

入試問題については、原則として旺文社の『全国大学入試問題正解』の各年度を用いた。巻末の解答例も原則として同書のものを示した。必要に応じて『最近五箇年大学別入試問題集　国語』（昭和三十二年（一九五七）七月　三省堂）を参照したところもある。仮名遣いや基本的な書式・表記も一部不統一なところも含めて同書に従ったが、便宜上問題文と設問の間には一行空けるという体裁にした。なお、昭和二十四年以前は新制大学に移行する以前であり、問題も現時点で入手できていないため、今回の考察の対象からは除いた。

二　素材文の発掘から書き下ろしへ

一章で取り上げた昭和三十一年度（一九五六）入試の大問三は現代文の問題で、現在の入試の傾向ともかなり趣が異なるが、亀井自身の出題意図が垣間見えるという点で注目される。

昭和三十一年度（一九五六）　大問三

去年の暮、はじめて伺うお宅があつて、何か手みやげにするものが［　　］。お菓子やふくさはこんなときによく使われるものだが、もうすこしすつきりやりた

かつた。こうしたおくりものの思いつきも歳の若いうちは上手なものだけれど、老いると［　　］になるらしい。若いときは常に足まめに歩きもするし、歩いたついでに捨て目を利かして何くれとなく見ておくし、勘もいいのである。その勘が年をとると退化してしまうから、散散あれこれと気をつかつた揚句、かえつてつぼを外したおくりものをしてしまうというへまをしがちだ。

それで、まああまり深思案をせずに、平凡だけれども白い紙にしようときめた。年の暮から春にかけては、どこのうちでも白い紙の遣い道が多いと考えたからであつた。奉書、糊入れ、美濃紙、良質の半紙でもいゝ、小じんまりと箱入れにすれば、清々しい出ず入らずの手頃なおくりものだと思い、紙で名の通つたしにせ二三を教えて使いを出した。

（イ）右の文の空欄の中に、原文にふさわしい表現をひらがなで書き入れよ。

（ロ）傍線を引いた部分を、原文の感じをそこねないで、ほかの表現にかえてみよ。

（ハ）次の言い方は、どういう意味か。

捨て目を利かす。

（二）この文章を書いた人は男性か女性か、

『學鐙』（昭和三十一年　一九五六・二）所収、幸田文の「紙」という随筆からの出題。亀井はこの随筆について同年五月の同誌に、「文章というもの」という小文を寄稿している。後に単行本の『ことばの森』に再録されていることで広く知られることになった文章であるが、その年三月に実施された入試に二月発行『學鐙』所収の「紙」が素材文として既に使われたというのは、現在の一般的な入試作成のスケジュールから言えば異例で、驚くほど「鮮度の高い」選定である。

「文章というもの」は、

本誌（『學鐙』）の二月号に、幸田文女史の「紙」と題する佳什が寄せられている。たれも、読んだ人はその風韻に魅了されたことであろう。わたくしも、その例外ではない。たゞ、職業意識というものは、かなしいものである。文章を渾然たる作品として賞美するよりさきに、表現のはしばしの方に気を取られてしまうのが、ひごろ、身についてしまったくせなのである。それで、まず、それから話を進めること、しよう。

と書き出し、「紙」の冒頭を引用する。入試で出題した個所とちょうど同じところである。幸田文に対して用いられている「女史」は、かつては敬称であったものの現代の用語の基準では不適当とされるが、問いの（二）にある、「この文章を書いた人は男性か女性か」という、入試問題の適切さから言えば疑問符が付く問題との平仄は合っている。いずれにせよ亀井の入試問題作成が自身の同時代的な関心事と密接な関係を持ってなされていたこと、独特の観点から素材文が選定され、出題されていたことの一つの例証にはなるだろう。

また、第二期の問題では亀井自身が入試のために書き下ろしたとおぼしき文章や研究の一環として書かれたような文章が出典となっているケースがしばしば見受けられる。本稿では第二期の問題の中で、亀井の書き下ろしと考えられる入試問題については大問ごと文章だけではなく設問まで全て参照するが、紙幅の関係もあり設問への言及はできるだけ控え、問題そのものの紹介を主眼に置きたい。

昭和三十二年度（一九五七）の現代文は、現代文・古文の融合問題の体裁であるが、亀井が「リライト」という形で手を入れたものである。

昭和三十二年度（一九五七）　大問二

ラ・ロシュフコーのことばに、もしも恋愛に関するはなしを聞かなかったならば、恋愛を知らなかったであろう人々について書いた一節がある。もし日本語が「愛する」という語を知らないまゝ、現在に至っていたと仮定すれば、日本人のこの感情に対する把握のしかたは、きっと今日のわれわれの把握と同じではあり得なかったであろう。「愛」と「憎」とを相関的な概念としてわれわれは疑わない。「憎む」という語に対してその反対の語はなにかと問われるならば、現代人なら即坐に「愛する」を挙げるはずである。ところが、枕草子第六十八段「たとしへなきもの」には

たとしへなきもの。夏と冬と。夜にくむ人と。…昼と。雨降る日と照る日と。人の笑ふとはらだつと。老いたると若きと。白きと黒きと。おもふ人とにくむ人と。……

と、「憎む」に対して「おもふ」が現れている。「愛する」という意味の語が存在していなかった昔、こうした感情は、ひろく漠然と「おもふ」の範疇に包括されていたのである。問題は、結局、世界の切り取り方にあるのである。さて、たとえあい似た感情を切り取ったにしても、ひとたび言語を異にし時代を隔てると、其処におの

ずからなる不一致が生じ、両者が符合することはむしろまれである。中国の「天不愛道」という一句を、もし“Heaven loves not righteousness”と訳したら、それはまったくの誤りである。こゝに思い合わされるのは、日本語の「をし」である。かの有名な万葉集の大和三山の歌「香具山は畝傍ををしと耳梨とあひ争ひき……」の「ををし」（原歌の万葉がなは、「雄男志」）は、これを「男々し」と解く説も古来おこなわれきたったが、これは、「雄」を助詞「を」と解し、「男志」を形容詞「をし」と見る説をとるべきである。畝傍を独占したいという香具山の心情を、「をし」の一語に、作者はおそらく託したのである。なお、日本語において、一見、「愛する」に近い意味を有するかに思われる「恋ふ」は、本来は、英語の“miss”に近い意味の語であったのである。万葉集で「こひ」に対し、しきりに「孤悲（コヒ）」のあて字が用いられているのも、一つの傍証になる。たとえば

孤悲死牟後者何為牟生日之為社妹乎欲見為礼

恋ひ死なむ後はなにせむ生ける日のためこそ妹を見まくほりすれ

不明公乎相見而菅根乃長春日乎孤悲渡鴨

おぼほしく君をあひ見てすがのねの長きはるびを恋ひわたるかも

之賀能安麻能一日毛於知受也久之保能可良伎孤悲乎母

安礼波須流香母

之賀（地名）の海人（あま）の一日（ひとひ）もおちず焼く塩の

［　　］

右の文をよんで、左の問いに答えよ。

（イ）「たとしへなし」とは、どういう意味か。かならずしも一語でいゝかえなくてもいい。簡明な口語で述べよ。（たとえば、「対照の妙がおもしろい」のように。）

（ロ）「天不愛道」の「愛」とは、一語でいえば、現代日本語のなんという語にあたるか。

（ハ）右の文に引く万葉集のうたの「をし」を、一語でいゝかえれば、現代日本語のなんという語にあたるか。

（ニ）「生ける日」の「生ける」を、現代日本語でいゝかえると、どうなるか。

（ホ）万葉集のうた三首のうち、第三番目の下の句が空

欄になっている。どうよんだらいゝか。それを空欄のわくのなかに書きいれよ。

旺文社『全国大学入試問題正解』の解説欄には出典は示されておらず、受験業界においても内容から推すに亀井自身の手によるものかもしれないが確定はできない、という理解だったと推測される。文章の難解さや設問の奇抜さに加えて、万葉集の歌の解釈についての内容も専門的に過ぎるところがあり、高等学校の学習範囲を逸脱している感は否めないが、それもそのはず、この文章は佐竹昭広の論文「語彙の構造と思考の形態」（『国語学』第二十七輯、昭和三十一年（一九五六）十二月）の一部に亀井自身が用例を追加してリライトした、言わば佐竹・亀井合作のような「書き下ろし」出典なのである。

問題文は、日本語において「愛す」という語が昔は存在しなかったということをラ・ロシュフコーの箴言から説明している。しかし、たとえば前半の“Heaven loves not righteousness”は佐竹論文では《天は正義を愛さない》という日本語訳になっているなど、全体に基本的な文意は損わない程度であるが、元になった論文とはかなり多くの異同が見られる。ここから数行は入試問題では省略されている。そして最終段落の「たとえば」以下の万葉集の引用は亀井の追記による創作である。なお、この省略箇所から亀井の創作文までの部分は、『萬葉集抜書』（岩波書店・一九八〇）以降に再録された著作では、本文ではなく注に回されている。いずれにしても他人の学術論文を入試用に改変するなどというのはあまりにも大胆な試みだとも言える。ただ、佐竹論文の発表が昭和三十一年十二月で入試は翌三十二年三月の実施となっており、佐竹の「昭和三十二年春から三十五年春まで、私が学習院大学から京都大学へ転ずるまでの三年間は、直接謦咳に接すること、もっとも濃密な三年間であった。」（『言語文化くさぐさ　亀井孝論文集5』序）という証言や両者の関係[3]を考え合わせると、この「合作」に関しては、ある程度話はついていたのかもしれない。

当時の受験生側からの意外な証言もある。『一橋大学創立150年史準備室ニューズレター No.4』（二〇一八・三）に寄せられた受験当時の感動を回想を語る一節は、とかく悪評ばかりが聞こえる一橋大国語の問題を高く評価している点で傾聴に値する。

一九五七年に受けた入学試験の国語の問題に接したとき、私は感動した。正確には覚えていないが、ラ・ロシュフ

ーコー（フランスの箴言家）の愛という言葉から万葉の大和三山の「香具山は畝傍ををし」を導く問題だった。こういう問題で落とされるなら悔いはないと思った。出題者は亀井孝先生だった。亀井先生の入試問題は難しいので有名で、私のゼミの岡義達先生（政治原論）は、一橋の学生は亀井さんが難しい入試問題をだすので勉強せず、国語の学力がないので困るとよくぼやいていた。しかしこの問題はなまじの受験勉強などが通用しない、考える力を重視したものであったことは間違いない。大体大学ともあろうものが、受験産業に「傾向と対策」を立てられるような問題しか作らなくてどうするというのが生意気盛りの私であったし、お陰で二年も浪人した。

（宮崎省吾「私の（住民運動）思想史における一橋大学時代（一九五七―一九六一）」）

毀誉褒貶の激しい第二期の問題の奇態ぶりは、この年度から加速していくことになる。

三　「まことに驚きいったる悪文」

このように、第二期では亀井自身が入試のために書き下ろしたとおぼしき文章や、研究との接点がほの見える文章が出典になっているケースがしばしば見受けられる。とりわけ、昭和三十四年度（一九五九）の大問三（甲）[4]は物議を醸したことで知られている。万葉集の訓について書かれた文章が難解な上に、その設問の意味が取りにくくあまりの難問であったことをめぐって、『言語と文芸』誌上で酷評された。その顛末は小島幸枝前掲書にも詳しいが、この騒動を巡ってはこれまで問題自体が取り上げられたことがなかったため、議論の全体像や評価については判然としないところがあった。ここに現代文、古文の選択問題の大問を引き、評者の見解と照合してみたい。

昭和三十四年度（一九五九）大問三（甲）大問三（乙）

> 万葉集の一首一首、いな、その各部分それ〴〵の訓の決定は、個々の作例の表現の解釈に属する。さて、解釈について、高次の解釈、低次の解釈といふことのいはれることがあるが、もし、こゝにそれら全体を一つの構造として解釈の階制といふ形でとらへてみるならば、訓の決定、といふよりは、訓の設定、それは、それ自体としては、従来さうみられきたつたやうに、たしかに、低次の諸段階にかゝはる技術的な問題としてきりはなしてみ

ることができはする。しかし、個々の訓の設定にあたつて、その手順において論議の余地がなければ、こと考証に関するかぎりは、その適否をあへてあらたに吟味しないのが、たとへ、ふつうではあるにしても、作品にとつてのその真の適否は、すくなくとも理論的には、解釈の階制全体のなかではじめてしかるべく判定されるものといふべきである。すなはち、訓の技術的な設定に対する、作品の一個全体を主体とするたちばからの価値判断は、当然、低次の解釈の段階をこえてゐわけである。そのやうな訓の適否の判定のためには、だから、言語的諸文脈および非言語的諸文脈のあらゆる文脈に対する深いよみ（＝理解）が必要である。このやうなよみのふかさあささは、しかしながら、それが表現の解釈に関するかぎり、結局は、職人的なない（＝経験）に左右されるであらう。いつの世にも、修業をつんだ腕のいゝ職人のつよいことに、かはりはないはずである。そして、おそらくは、芸術家が、じつは、さうであるやうに、学者も、譬喩的にではなく、本質的に、まづ、職人であるとわたくしは考へる。しかしながら、文脈とよみとの相関関係は、それそのものとして、理論的対象になっていいわけである。

このような問題に対する理論を、簡単に文脈論とよぶならば、いままでのすぐれた註釈がしらずしらずにとってきたところのみちは、つまり、すぐれた学問の腕がおのづと格にかなひもしはまりもしたしごとをしてゐるその格とは、文脈論といふ形で反省されたものを職人としての学者はうちださなかったとこそいへ、これを文脈の術語で名づければ、身についた文脈論的方法といひうべきである。

右の文をよんで左の問いに答えよ。

Ⅰ「すくなくとも理論的には」とある「理論的には」の「理論」が対象的になにらかの理論を意味しているとすれば、それは、どんな内容のものであるべきかを、この問題文のなかにあることばをつかつて、「何何の理論」と書いて答えよ。（二十字以内）

Ⅱ また「すくなくとも」というのは「理論的には」ということばの妥当性を確保しようとすることばであるが、どういうことがらに対して確保しようとするのであるか。（二十字以内）

Ⅲ「非言語的諸文脈」とは、どんなもののことか。

（二十字以内）

Ⅳ「学者も、譬喩的にではなく、本質的に、まづ、職人である……」と書いてある。

これにもとづけば、職人であることは学者たることに対して何らかの条件であるのだが、それは条件としてどのような性質の条件であるか。

（二十字以内）

Ⅴ「文脈」「よみ」「文脈論」「なれ」の四つのあいだにある関係を、この文の筆者はいかなるものとして考えているかを、簡明に書きしるせ。（六十字以内）

大問三　（乙）　○えんま　次第地獄の主閻魔大王〳〵、六道にいざや出でうよ。詞やい〳〵、眷属ども、居るか。○三人鬼　はあ、これに居ります。○えんま　罪人が参つたら、地獄へ責め落し候へ。○三人　畏つてござる。○シテ　次第　罪も作らぬ罪人の〳〵、誰かは寄つて塞かうよ。詞　これは娑婆に隠れもない、清瀬と申す餌差でござる。われ寿命のほども、定りけるか、無常の風に誘はれ、ただ今冥土へ赴き候。謡　住みなれし、娑婆の名残をふりすてて〳〵、足に任せて行く程に〳〵、六道に早く著きにけり。詞　これははや六道の辻に著いてござる。これより見計ひ、極楽へ参らばやと存ずる。○鬼　はあ、いかう人臭い。さればこそ、罪人が来た。まづこの由申し上げう。如何に申し候。一段の罪人が参りて候。○えんま　急ぎ責め落し候へ。○鬼　畏つて候。如何に罪人。地獄遠きにあらず、極楽遙なり。急げ〳〵とこそ。やい〳〵、汝は常の罪人とは変り、興がつた態。娑婆では何と云うた者ぞ。○シテ　某は、娑婆に隠ない清瀬といふ餌差でござる。○鬼　餌差ならば、明暮殺生して罪が深からう。地獄へ責め落してくれうぞ。○シテ　いや〳〵、某はさやうに罪の深い者ではござらぬ。極楽へやつて下されい。○鬼　いや〳〵、まづ閻魔王へ伺はう。如何に申し候。○えんま　何事にてあるぞ。○鬼　罪人は、娑婆に隠れもない餌差にてあると申すほどに、一入殺生して罪が深くござあらうずる間、地獄へ落さうと申し候へば、さやうの者にてはなきと申し候が、何と仕らうずるぞ。○えんま　さあらば、その罪人の、此方へ呼び候へ。○鬼　畏つて候。こりや〳〵、閻魔王の召す。此方へ来り候へ。○シテ　畏つてござる。○鬼　罪人の召して参り候。○えんま　如何に罪人。汝は娑婆にて明暮諸鳥をさし、大悪人にて

ある間、地獄へ落さうずるぞ。○シテ　仰せ御尤に候へども、鳥をさし、鷹と申すものに食はせて養ひ候ほどに、余り科（とが）にてはなく候。○えんま　さては鷹といふも、同じ鳥にてあるよな。○シテ　なか〳〵、さやうでござる。○えんま　それならば、余り汝が科でもない。○シテ　御意の通、鷹が科でこそござれ、私の科ではござらぬ。極楽へやらせられて下され。○えんま　それならば、この閻魔王も、終に鳥といふ物の味を知らぬほどに、鳥と云ふ物が、死出の山に沢山ある程に、汝が持つた竿でさいて、閻魔王に振舞へ。それなら、汝が望のやうにして取らせうぞ。○シテ　それは何より安いことでござる。さらば、鳥をさいて進上申しましよ。謡　いで〳〵諸鳥を差さんとて、地　〳〵、死出の山路の南原より、鳥どもあまた飛び来るをば、見るより早く、中（ちゅう）にて差いてぞ取つたりける。さらばこの鳥を焼鳥にして進ぜませう。さらば参りませ。○えんま　どりや〳〵食うて見よ。めりり〳〵〳〵。さてもいかう旨い事かな。○シテ　さらば眷属達も参れ〳〵。○鬼　心得た〳〵。めりり〳〵〳〵、これは〳〵旨いことかな〳〵。○えんま　さても〳〵、いかう旨いものぢや。この様な旨い物をくれたほどに、暇を取らするぞ。娑婆へ帰り、三年が間諸鳥をさいて暮らせ。○シテ　これはありがたい事でござります。○えんま　謡　いで〳〵、暇を取らせんとて〳〵、地　娑婆に帰り、三年が間諸鳥をさして、鶴、雁、雉子、鴨、小鳥もたしかに届くべしと、仰を委しく承りて帰りければ、閻魔王も名残を惜しみ、玉の冠を清瀬に与へ給ひければ、忝くも頂戴いたし、〳〵て、二度娑婆へぞ帰りける。

右の文を読んで次の問いに答えよ。

Ⅰ「われ寿命のほども、定りけるか」という疑問文は、意味内容上、推量になっている。その推量の根拠になっている事実は何か。（二十字以内）

Ⅱ　またこの推量が疑問を存したものとなつている。その根拠は何か。（二十字以内）

Ⅲ　閻魔の「それならば、この閻魔王も、終に鳥といふ物の……」という「それならば」とは、ここではどんな意味内容であるか。（二十字以内）

Ⅳ　問題Ⅲで問題にした文章のすぐあとの「閻魔王に振舞へ、それなら、汝の望のやうに……」の「それなら」は、ここではどんな意味内容であるか。（二十字

以内）

V　この餓差十王と名づけられる狂言は、これを読んだ限りにおいて、部分的なこつけいもあろうが、それはおいて、全体として閻魔王がこつけいなものに仕たてられているとして、そのこつけいさは、いはば背理のことをかれが言つているところに生れている。その背理とは、必ずしも一つではないが、どんなものか。（六十字以内）

大問二については『全国大学入試問題正解』の解説に、「文飾や挿入句が多くセンテンスの長い文意の取りにくい文」と評されるように、亀井の文体が大学入試用に薄められることもなくそのまま発揮されたような文章で、大学入試国語の出典として異色であることは誰の目にも明らかである。例えば同時代の東京大学の問題や京都大学の問題を参照しても、ごく一般的で穏当な文章が選択されており、一橋大学―亀井孝―の出題が受験界にあっても特異であったことがこれから紹介する騒動に関わってくる。

なお、『全国大学入試問題正解』では出典に触れられているわけではないが、この文章や作問が亀井の手によるものであることは関係者の間では自明であるとして、「驚きいったる悪文」評へと展開していく。『言語と文芸』では創刊当初、大学入試問題を取り上げて講評する特集が組まれることがあった。この号（昭和三十四年（一九五九）七月号）では「落穂ぐさ」というコーナーで「大学入試問題摘評」として多くの大学の国語入試問題に関して、比較的手厳しいコメントが寄せられている。それぞれの批評に署名はないものの、末尾に評者が紹介されている。

◇この入試戯評は、編集部員の大久保広行・小西甚一・小林芳規・関良一・馬淵和夫・宮崎健三・峰岸明・両角倉一・渡辺義夫と青木孝（青山学院大）大野知二（都立向丘高校教諭・漢文）との寄せ書きに、やや手を入れたものである。（文責編集部）

このように当時の東京教育大学の教授陣や国語教育の重鎮がずらりと顔を並べ、教育的な立場から入試問題を一刀両断するといった、いささか好戦的な趣が感じられるコーナーである。まずは現代文について。

一橋大の問題文が難解なのは定評がある。今年の第三問もその例に洩れず、「（前略）さて、解釈について、高次の解釈、低次の解釈といふことのいはれることがあるが、

もし、こゝにそれら全体を一つの構造として解釈の階制といふ形でとらへてみるならば、訓の決定、といふよりは、訓の設定、それは、それ自体としては、従来さうみられきたつたやうに、たしかに、低次の諸段階にかかはる技術的な問題としてきりはなしてみることができはする。しかし、個々の訓の設定にあたつて、その手順において論議の余地がなければ、こと考証に関するかぎりは、その適否をあへてあらたに吟味しないのが、たとへ、ふつうではあるにしても……」という調子。まことに驚きいったる悪文で、こんな悪文が読めなくてはよい高校生といえないのか。旧かなづかいも墨守されている。内容は高校生として、社会人として、一般的に必要なものであってよく、万葉の訓点決定論というのでは、国語の問題だからといって、余りにも専門的に走ってはいないか。

この年の古文についても容赦がない。

一橋大では狂言「餌差十王」を出している。もちろん狂言自体がいけないというのではないが、当用漢字の範囲の学習をしてきた受験生に「眷属」「餌差」「如何に」「一入」「科（とが）」「隠」（かくれ）「着き」（つき）「終に」（ついに）「雑子」「委しく」（くわしく）「忝く」（かたじけなく）などを平気で原文のままぶつけたのはひどい。大一問に「下臣たるべき物は、先貞心肝要なり……」にも同様のことがいえる。当用漢字以外にいくらでも漢字を学習せよいうことになって、高校の国語科を乱すことになる。はっきりさせておきたいのは、出題者が当用漢字を好きだとか嫌いだとかいうことと、これの制限を大きく破って公的に公務を遂行することは別だということなのだ。出題で公私を混こうされてはたまならない。

狂言が入試問題として出題されることはきわめて稀である。「餌差十王」は内容的にも面白く受験生にも充分理解可能とは思われるが、やはりその独特の表現形式や用語は、注なしで読むのは厳しいと言える。また、ここでは引かなかったが大問一の古文の問題について、別の評者とおぼしきコメントも手厳しい。

「物知りたる人のきはめて不儀なるも多しと見え候。」を、等量の現代語を以て訳出せよ（一橋大）とあるが、「等量」[5]とは、意訳を避けた逐語訳のことか、字数が等しいということか、設問自体がはっきりしない。まさか後者

でもあるまいが、O社の解答もよほど困ったとみえて、「不儀」を原文通りにして、「二十三字」と括弧している。設問はもっと詳しくすべきで、むだなことで青年をいじめる結果になるのは、お互いに戒めたいものである。青年をきたえるには、もっと有用な内容できたえたいものである。

「落穂ぐさ」はわずか六ページ程度のコーナーで、冒頭に「問題の良否は、一応どう採点したかを尋ねてからでないとわからないものもあるが、しかし、些末の議論はおいて、端的に高校生の良き実力の打ち出しがいのあるもの、また高校教育を指導し、高刺戟をあたえようとしていうもの、そんな理想の鳴りひびいているものとそうでないものとは、一見して区別があるように思う。」という主旨を述べているように、教育的意義を重視しながら入試作問における研究者同士の相互批判を求めた試みでもあった。こうした座談会は同誌上で数回行われただけで姿を消してしまったが、入試の作問についての大学の姿勢、現在で言うところのアドミッションポリシーに言及していたり、学習指導要領との整合性が点検されていたりなど、現在から見ても非常に貴重な試みであった。ただ、今回のように特定の大学の問題に対してこれほどの分量を割いて酷評が加えられた例は他に一つもない。

これらの論評に亀井は激しく憤慨したようで、翌年発表された論文「『あめつち』誕生のはなし」（『国語と国文学』昭和三十五年（一九六〇）・五）に「前口上」なるものを置いて、遺憾の意を表明している。

さきごろ、あるところで、わたくしの文章に「まことに驚きいったる悪文」との判定がくだされた。俊敏な頭脳によってくだされたこの判定そのものに対しては、つぎのことばを吟じて、ひそかにわれとこころをなぐさめるのみ。「われとわが作品へ、一言の説明、半句の弁解は作者にとっては致命の恥辱。文いたらず、性いたらぬこと、深く責めて、他意なし……」（太宰治　創世記）。われ、もとより、みずからをはからず、いたづらに、さぎ（鷺）のまねをしよう、とはおもはない。からすのくろぐろと我流のふでで〆がくところの、その、この一篇に対し、ねがはくは、からすをさぎと見まがへて期待をよせられざらんことを。

驚くことに亀井は、「『あめつち』誕生のはなし」の発表に先立って、その年の三月に行われた入試の漢字書き取り問題に、この太宰治の「創世記」の一節を用いた出題をしている。入

試の作問と当該論文の執筆時期はほぼ重なると思われる。

昭和三十五年度（一九六〇）大問一

われとわが作品へ、一言の説明、(一)はんくの(二)べんかいは作家にとつては(三)ちめいの(四)ちじょく。文いたらず、(五)性いたらぬこと、深く責めて、(六)たいなし、人をうらまず独り、われ、厳酷の(七)しようじん、これわが(八)さつかこうどう十年来の(九)きんかぎよくじよう、苦しみの底に在りし一夜も、ひそかにわれを慰め、しづかに微笑ませたこと(一〇)さいさんならずございました。けれども、一夜、(一一)てんてん、わが胸の奥底ふかく秘め置きし、かの、それでもやつと一つ残し得たかなしき(一二)自矜、若きいのち破るとも(一三)こじよう、まもり抜きますとバイロン卿に誓つた(一四)おきて、苦しき手錠、重い(一五)てつさ、いま豁然(一六)いつしよう、投げ捨てた。淵に真珠、豚に真珠、(一七)みらいえいごう、ほう、真珠だつたのか、おれは嘲つて、恥かしい、など(一八)素直にわが過失みとめての謝罪どころか、おれは先から知つてゐたねえ、このひと、ただの書生さんぢやないと見込んで、去年の夏、おれの畑のたうもろこし、七本ばつか呉れてやつたことがあります。まことは、二本。そのほか、諸処の(一九)むちゆゑに情薄き(二〇)ひようじようの有様、手にとるが如く、眼前にましろき滝を見るよりも分明、知りつつもわれ、真珠の雨、のちのち、わがためのブランデス先生、おそらくは、わが死後、――いやだ！

問い

傍線が施してある文字を、それが仮名（現代仮名づかいによつている）である場合はそれに該当する漢字で、それが漢字である場合はそれの読みかたをあらわす平仮名で、それぞれ書き改めよ。答えは、各番号ごとにつぎの場所（省略）に書くこと。

この出題には、全国高等学校長協会が『昭和三十五年度大学入試問題所見集』（同年十月）において、辛辣な批判を寄せた。

一般に、書き取りや仮名つけの問題文は、あまり特殊でない、すなおでかつ身近な文章であることが望ましい。さらに、なるべく当用漢字および音訓表の枠をはみ出さないようにしていただきたい。ところが、本問題は、こ

の二つの要請をふみにじっていると思う。だいたい、書き取りの問題に、太宰治のこういう文章を取り上げた点に無理があるのではないかと思う。これは、文語と口語をつきまぜた特異な文体であり、内容的にも飛躍の多い難解な文章であって、傍線を施した部分にしても意味のとりにくいものが少なくない。

「無理がある」のも当然である。亀井にとっては「驚きいったる悪文」評への憤慨の胸の内を自虐的に太宰の文に仮託したのであって、受験生への配慮などは二の次だったに違いない。

こうして、入試問題が入学者選抜のために存在しているという本質的な役割や、大学と受験生との対話であるという建前を大きく逸脱し、大学の教員や全国の高等学校の教員を巻き込んだ、言わば「場外乱闘」に発展してしまったのである。

四　毀誉褒貶の入試問題

この年度の大問三（甲）は亀井のよく知られた論文である「虹二題」を出典としているが、これは前年のような酷評ばかりではなく、賛否両論が巻き起こった問題として注意が必要である。

昭和三十五年度（一九六〇）　大問三（甲）

虹の出現において、古代の民衆は季節感をそそるはかない詩的風物をそこに直感はせず、いやしくも、それのかもしだす美の範疇について語りうるかぎり、えもいえぬ自然への畏怖や不吉の識にくまどられた妖幻の美とでも呼ぶべき感覚的幻想にうちまかされたことであろう。いな、たとえば、都会の淡い感傷といつたなにらかの近代的情緒のその象徴になりうるかもしれないところの、そそり立つ高層建築の果てにほのかにかかる暗い虹でははなしが別になるが、太古そのままの澄明な自然をいろどる虹の、その目をあざむく美しさなら、それは、日ごろの近代的な生活の感情からわれわれを解放して、むしろ異様な感覚の幻想へひとを誘いこむことであろう。たとえば、つぎのごとき文章は現代人の感覚としてそれを描いたものである。

峠を越えて、人里遠い岨道を自然の静寂にひたりながら下つて行つたわたくしは、忽焉として山峡をつないだ巨大な虹のうつばりをあたかも眼の前にはつと見た一瞬、神秘の自然へ足もとがくずれて吸いこまれるような幻覚を感じた。それは、たしかに一瞬の出来事で

あつたが、途端にあとさきの時間が消えてしまつて汎神論的自然のその美に魂を奪われた、そういう怖ろしい一瞬でさえあつた、といういまだにまざまざとした一つの憶出となつている。

とはいえ、この「神秘の自然」とは、やはり近代人らしく、もつぱら唯美主義的な創作童話風な幻想である。万をもつてかぞえうる古代の和歌の作品の中に虹を題材としたものの存在しないのは、偶然ではないであろう。

一、「いな」は、文脈に対して、いかなる役割を演じているか。すなはち、それによる前後の文章の内容の展開のしかたを述べよ、また、「いな」に照応していることばがある。それを指摘せよ。

二、「いやしくもそれのかもしだす美の範疇について語りうるかぎり」を括弧に入れて、それをどこかへ移すとするならば、それはどこのことばの下に移されるべきであるか。その言葉を書きだして示せ。

三、問題文のなかの引用文に、「それは」ということばがある。これに対して述語となる部分があるはずである。その部分を書きだして示せ。

四、「一瞬の出来事」の「一瞬」と「怖ろしい一瞬」の「一瞬」との、内容規定を、対照的に比較して、ほどこせ。

五、問題文の文章によると、虹は、その出現の様相にしたがつて、近代生活人の「生活の感情」に対し、二様の反応をおこすものであることになつている。その二つの反応を対照的に比較して述べよ。

六、古代和歌が虹をその題材にとりあげなかつた点から、古代和歌の、文学としての限界または特徴を整然と論述せよ。

『全国大学入試問題正解』の解説には「亀井孝の文。難問である。」とある。よく言えば格調高く受験生の思考力を存分に試すような作問になっているが、確かに難しい。

この問題について亀井孝論文集の書評である石井久雄「書評・紹介」（『言語研究』九二・一九八七・一二）に興味深い記述がある。

このひとが、みずからの文章にほこりをもっていることは、一橋大学につとめていたおりに、その入学試験問題の国語のひとつとして、みずからの文章をとりあげたことにも、うかがわれるであろう。わたくしは、一橋大学の入試問題そのものはみたことがないのであるが、ても

とに一冊の高校参考書をもっている。関良一氏〝シグマ・ベスト 新課程 解明現代国語〟であって、そこで、論文集第4巻 第20論文、虹二題、（一九五九年）の

虹の出現において、古代の民衆は、季節感をそそるはかない詩的風物の美をそこに直観はせず、いやしくもそれのかもしだす美の範疇についてかたりうるかぎり、えもいえぬ自然への畏怖や不吉な識にくまどられた妖美とでもよぶべき感覚的幻想にうちまかされたことであろう。（v.4 p.357）

にはじまる一節に、であったのである。関氏は、典拠不明ながらこのひとの創作であろうと推測し、〝虹と古代和歌〟と仮題を付することもして、さらに、このひとをてみじかに紹介している。その文章をおさめ、その作者をいいあてた、関氏の慧眼に、わたしは感服する。くだんの参考書は、新課程をうたっても15年以上まえの当時のそれ、現在は〝シグマ・ベスト新課程 解明新現代文〟となをあらためて改編され、しかし、このひとの作品はなおいきている。

学習参考書は入試の良問集という意味合いもあり、石井の記述通りこの問題が長らく「シグマベスト」に採録され続けていたことは、亀井の入試問題への肯定的な理解の証として記録しておかなければなるまい。なお巻末の解答例に一、六の設問のみ、旺文社とはやや異なる解答を示している同書（関良一『シグマ・ベスト新課程新現代文』文英堂・一九八四）の見解も併記した。

ところが、この問題について、前述の全国高等学校校長協会の所見では次のような評価であった。

（1） 問題文が難解である。「美の範疇」「識」「汎神論的自然」等の語は高校生にはむずかしい。本文が現代かなづかいで書かれているのはよいが、当用漢字の枠は無視されている。

（2） 文章は難解だが、論述の筋は通っている。その点は一応よいとしても、問いの意味はとりにくいものがある。たとえば、一の問いなどは、出題者の要求を理解することはむずかしいであろう。

（3） 四および六もはっきり答えにくい。

総じて、この問題では一から六まで全部記述形式のものであることが、この問題を難解にしていると思われる。問いによっ（ママ）は客観テストを適当にまじえたほうがよいと思われる。

こうした批判を承けて、亀井は翌年度の入試問題でとんで

もない出題を行った。

昭和三十六年度（一九六一）　大問一

来年度の大学入試をひかえて全国高等学校長(1)キョウカイは、三十五年度の出題を(2)ケントウした結果を(3)ハッピョウした。それによると、各大学の出題(4)ケイコウは年々(5)カイゼンされているが、まだ程度が高すぎたり、学習(6)シドウョウリョウの(7)ハンイ外の出題がある、といっている。

一、右の文中の、かた仮名の部分を、それに該当する漢字に、書き改めよ。答えは、それぞれ、つぎの個所（省略）に記すこと。（字体は、当用漢字のでよい。）

二、右の文中の「三十五年度の出題をケントウした結果をハッピョウした」のなかの二つの「した」を、文語の言い方に改めて、この一文の全体を文語文にかえよ。答えは、左の□のなかに、書きいれよ。

三十五年度の出題をケントウ結果をハッピョウ□□。

三、右の文中の「まだ程度が高すぎたり」に呼応する部分を、言い方の点でも正しく呼応するように、書き改めよ。答えは、つぎの、指定の［　　］のなかに書き入れよ。

まだ程度が高すぎたり、［　　］

この年度の国語は他に詩の問題が一題のみで、前年までの傾向とは大きく異なる、言わば「試合放棄」のような出題であった。[6] 先の「創世記」の一節による意趣返しが、今度はより直接的な形で表現された創作問題であり、これまでの場外乱闘に全国学校長協会までもが巻き込まれることとなった。この「事件」はなかば伝説のように語り継がれ、昭和四十六年十一月二十三日の読売新聞「教育」欄に、「大学入試絶えない難問・奇問」という「大学入試所見集」をめぐる特集においてこの時のエピソードが取り上げられている。

古文の難問を出すので有名だった一橋大学の某元教授は、自分の出題が所見集のヤリ玉にあがったのに腹を立て、ごていねいにも悪問と批判された所見集の一節を、書き取り問題の素材として翌年の入試に出題したという。この件についての伝聞による証言は、田中克彦の自伝（前掲書）にも語られている。

後に先生ご自身からうかがったのであるが、あまりにもひどい問題ばかり出続けるというので、全国高校校長会

の名で一橋大学の国語入試出題者は、大いに反省して、もっと正常な出題に改められよという抗議文が来た。そこで亀井先生はどうなさったのか、うかがったところ、田中、それは次の年の入試問題に使って、この文章を批判せよと出題したんだよとのお話しだった。ご自身の話なのでほんとだと思うが、たしかめていない。

多少の記憶違いはあるものの、この折の話を亀井自身が武勇伝のように語っていたというのは興味深いエピソードである。しかしながら亀井の腹の虫はまだ収まらなかったようで、翌年にはまた違った形で入試問題のあり方について一石を投じている。

昭和三十七年度（一九六一）　大問三

年があけると、眠っていたふさぎの虫が、春にさきがけてうごめきはじめる。またかとおもう。なにがまたか。だれがふさぎの虫なんか飼っておくもんか。飼いたくなんかあるもんか。飼いたくないものを飼ってなどとは、そらぞらしい。そんな虫なんかいるわけがない。しかし、いるんだ。それが目をさますわけは、なんでもない、見えない受験者の波をすでにまえにして、ことしも日本ならではの何やら地獄の交通整理のそのおやくめのこの片ぼうをまたもかつがされての俗にして神聖な問題つくり、くさくさしても株を守ってうさぎとは出ない。日本語に日本語でこたえる国語の試験で、日本語にの日本語と日本語での日本語とがおなじ現代語となると、りくつはぬきに、なにが要求できるというのだ。もっとも、日本語は、ふつう、単数と複数とをわざわざいいわけないのがくせなだけに、なにがといっても、現実には、このばあい、むしろ、なになにがという線で考えるべきかしらんが、しかし、そのなになにのうち、書きとりとよみかたは、しょせん、文字の問題だし、また、いわゆる国語解釈、右から左へぬけるいいかえが、それだけで意味の解釈の名にあたいするものならば、これはおめでたい。そうなりや、どのみち、ほんとのなには、どっかもっとほかへこれをもとめてゆくべきだろう。だからとて、記憶力をためすということ自体は考ええても、まさかワンワンとほえる動物を正式の日本語ではなんというかときいて、それで単語の力をためすわけにもいかない。ものごころつかぬあかごのときから、せっせとおぼえて蓄積したその母語の富のそれはそれとしてそのうえにそれをつかいこなす力をみるとすると、表現力をためしてみるこ

ととなろうが、表現力をためすには作文を課すのがいちばんいいとおもうけれど、しかし本格的な作文となると、またこれはこれなり、考査の実行にあれこれ困難がともなってくる。いきおい、理解力の程度をなんとかたしかめてみようとして、ためにそんじょそこらをほっつきまわって、あれでもない、これでもないと、いささかすなおでない文章をえらびだしてくると、悪文に対する分析の力をみることになりかねない。これでもんでみるのも、世間には非悪文ばかりあるどころじゃないから、わるいとはおもわないものの、それでためしうるところは、やっぱり、ほんとは、なんの力なんだろう。真に表現の内容的な把握の力ということになると、文学作品のその作品解釈と科学の論文のその専門的な内容の理解とで性質がちがってくるのはいいとして、そもそもぼくにしてからが、文芸評論家でもなければ、科学者でもない。だから、国語の考試の真のねらいは、くりかえしていえばぐちになっても、一体、どこにおけばいいんだ。

いまだにそんなことをぼやいているんじゃ、ふさぎの虫にとっつかれるのもげにむべなるかな、こりやかなわんとちと気さんじの、なればしあわせ、厄はらいにまで、すりやこそ、いわざなおわるかろう、こんなごたくをごたごたと、吉例の年中行事、答案しらべのそのやくまではとにもかくにも、福は内、鬼は外、節分の夜しるす。

（秋耕堂未刊落書帳より）

一、「いまだにそんなことをぼやいているんじゃ……」以下の、右の問題の本文における、この最後の文の、そのおわりまでを、諸君がもっともすなおとおもう現代語の表現に書きあらためよ。そのさい、原文のいいまわしをかえることによって、原文をふえんすることになるのはよいが、いわゆる語義の解釈をほどこすことと、原文に諸君の主観をよみこんで創作的にそれを書きなおすこととは、それぞれに無用である。三〇〇字分原稿紙省略）

二、左に挙げることわざのなかから、

（Ⅰ）「株を守ってうさぎ」にもっとも近い意味のものを一つえらび、番号でこたえよ。

（Ⅱ）「株を守ってうさぎ」が、問題の本文にとって十分に適切な表現でないとみたばあい、これに代えて、そこの文意にもっとも適切なものを一つえらぶなら、それは何番のものか。

（1）鬼の目にも涙　（2）待てば海路のひより
（3）打てばひびく　（4）ぬれ手であわ
（5）やなぎの下にどじょう
（6）ひょうたんからこま
（7）たなからぼたもち
（8）果報はねて待て
（9）案ずるよりうむがやすし
（10）地獄でほとけ

三、

（Ⅰ）「またこれはこれなり」を、いっそう普通ないい方に移しかえよ。（「また」は、もとのままでいい）

（Ⅱ）「その母語の富のそれはそれとしてそのうえにそれをつかいこなす力」のなかで、「それはそれとしてそのうえに」が、どういう意味内容をもっているか、それをその前後にあることばをつかって説明せよ。

（Ⅲ）「記憶力をためすということ自体は考ええても」において「自体」ということばはなくてもよいと原文の筆者は考えたが、しかも、とくにそれを加えた。これを加えることによって、筆者はよみ手にどういう意味をとくに印象づけようと意図したか。

（Ⅳ）「日本語に日本語でこたえる国語の試験で、日本語にの日本語と日本語での日本語がおなじ」でないばあいがあるとすれば、それは、たとえば、どのようなばあいか。できるだけ簡単に指摘せよ。

（Ⅴ）問題の本文の趣旨や内容には関係ないが、これを読んで、浄るり「神霊矢口渡」の作者□□□内の戯作名□内□□を、たまたまおもいだした人があると仮定する。この仮定の上に立って、この四角の空白の中に、しかるべき文字を入れよ。

『全国大学入試問題正解』の解説に「出典は明示されているが、内容からおして筆者は出題者自身とみられる」と指摘があるように、亀井は自ら「秋耕堂未刊落書帳」[7]なる出典を拵えて、愚痴ともぼやきとも取れない随筆を書き下ろして出題した。「やく」が「役」と「厄」の掛詞になっており、「福は内……」は「そのやくまでは」を受けるというのは洒落が効いているというべきか、「いたずらにすぎる」というべきか、いずれにしてもこうした言葉遊びまでが設問に関わってくる。

ところで、末尾の「節分の夜しるす」を信じるならば、前述したように、現在の入試作問では考えられないスケジュー

ルである。しかしながら、このあたりは逆に一橋大学がほぼ亀井一人で国語入試の問題作成に当たっていたことを裏付けてもいる。入試問題が入念なチェックを受けて整えられた完成版という体ではなく、出題者の息づかいの痕跡がまだ問題用紙から抜けきっていない、そんな問題とも言える。

意表を突く問題とはいえそのバリエーションの豊富さは受験生のみならず世間をも巻き込んだ騒ぎになっていたようだった。『週刊文春』（昭和四十二年（一九六七）十二月四日号）に「ああ　大学入試に愚問賢答」という特集が組まれ、この数年の出題を取り上げている。

国語現代文の問題では、有名な話が残っている。三十五年の一橋大学の問題に、この高校側の所見集が「難解すぎる」とかみついた。ところが翌三十六年の同大学の入試問題をみて高校側はおどろいた。その所見集がそっくりそのまま問題文に使ってある。それどころか、三十七年には、いかに出題者が問題作成に苦労しているか、という趣旨の文章が入試問題として出されたという。このエピソード、フザけているというか真剣というか、どうもアタマをひねってしまう。

こうした一連の流れ、亀井自身の入試作問についての葛藤や試行錯誤、あるいは迷走ともいえる場外乱闘は、翌昭和三十八年度（一九六三）に一つの節目を迎える。前年までの一橋大学の入試は、一次試験が英語と数学で、国語は二次試験のみの出題であったが、この年から一次、二次ともに国語が出題されるようになった。

五　一次試験・二次試験の「連作」

昭和三十八年度（一九六三）第一次試験　大問二

左衛門の内侍といふひとはべり。あやしう、a すずろに[1]よからず思ひけるも、え知りはべらぬ。心うき b しりうごとの、おほう聞こえはべりし。うちのうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたまふべけA□。まことに c 才あるべし」と、[2]のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじくなむ才あB□」と、殿上人などに[3]いひちらして、日本紀の御局とぞ[4]つけたりけC□、d いとをかしくぞはべD□。このふる里の女の前にてだに[5]つつみはべるものを。

注　（1）「え知りはべらぬ」の主体は作者である。

（2）「このふる里の女」は作者が自家で召し使

っている女。

右の文章は三つの段落に分けることができる。そのうち第二段（あやしう……聞こえはべりし）を、作者の立場にもとづいた人物批評としてではなく、世間の風評を記述したものと解して、次の問いに答えよ。

問一　傍線――をほどこした部分（1～5）の動作状態の主体はだれか。次表からそれぞれ該当するものを選び、イロハ……で答えよ。

イ　左衛門の内侍　　ロ　うちのうへ　　ハ　殿上人
ニ　ふる里の女　　ホ　作者
ヘ　上記（イ～ホ）以外の人物

問二　「よからず思ひけるも」は、だれを「よからず思ひけるも」なのか、問一の表から該当するものを選び、イロハ……で答えよ。

問三　文中の空所（A～D）には何を入れたらよいか。補うべき文字、それぞれ一字を解答欄（省略）に記入せよ。

問四　文中～～～～線の部分（a～d）はどういう意味か。次に掲げるもののうち、もっとも適当と思うものを選び、イロハ……で答えよ。

a「すずろに」
イ　妙に　　ロ　思いもよらず
ハ　漫然と　　ニ　あさはかにも

b「しりうごと」
イ　うわさ　　ロ　かげぐち　　ハ　うれしいこと
ニ　とりとめもないこと

c「才ある」
イ　才智がある　　ロ　文才がある
ハ　漢文の素養がある　　ニ　文芸に通じている

d「いとをかしく」
イ　たいへん興味深く　　ロ　笑止千万で
ハ　なかなか趣のあることで
ニ　まことにほほえましく

問五　問題文は、ある平安時代の日記の一節である。その出典と思うものを次に掲げているものの中から選び、イロハ……で答えよ。

イ　紫式部日記　　ロ　枕草子　　ハ　和泉式部日記
ニ　土佐日記　　ホ　讃岐典侍日記
ヘ　蜻蛉日記　　ト　中務内侍日記
チ　更級日記　　リ　十六夜日記

一見、選択式の客観問題を用いた一般的な一次試験らしい出題に見える。傍線の付し方や選択肢も標準的で取り組みやすい。しかしながら二次試験において受験生は意表を突かれたはずだ。なんと、一次試験で取り上げた「紫式部日記」の一節の解釈に対して異説を提案するという問題が出題された。

第二次試験　大問一

さゑもの内侍といふ人はべり。あやしうすずろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ、心うきしりうごとの、おほうきこえはべりし。うちのうへの源氏の物語人によませたまひつつきこしめしけるに「この人は日本紀をこそよみたまふべけれ。まことに才あるべし」とのたまはせけるを、ふと推しはかりに「いみじくなむ才ある」と殿上人などにいひちらして日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女のまへにてだにつつみはべるものを。

（紫式部日記）

設問の一　右の「あやしう……おほうきこえはべりし」の一文は、これを次のように解釈するのが通説のようである。

この女はなぜだかむやみにわたしをきらつていたのだけれど、一向にわたし自身には心あたりのない、そういういう不愉快なかげ口をわたしはたくさん耳にしたものです。

紫式部が自分にことごとしいあだ名のついたことをばからしく思つている、そういう心理的文脈にこれをすえて考えるとき、この解釈は妥当なものであろう。しかし、別の解釈も考えられるのではなかろうか。紫式部日記にみえる人物評論の筆法は、とりあげんとする女性を、たとえばここの例で言えば「さゑもの内侍といふ人はべり」という形で、まず紹介し、ついでただちに、その人はかくかくの人物であるという批評に入るのが、一般である。「あやしう……」のこの一文についても、自分のかげ口を耳にしたという、そのような経験を事実として挙げたものとそれを見ないで、むしろ、「さゑもの内侍」がおのれの不評に気のつかないおめでたい人物であることを、まず概括的な一般的な輪廓として、描いたものとそれをうけとつてみたら、どうであろうか。「さゑもの内侍」のその不評を首肯せしむべき証拠としての具体的な個別的な事実に、「それにはそれだけのことが本人にあるのだ」とか、「それには筆者にも思いあたるふ

しがあるのだ」とかなどといつたふくみで言及したのが、「うちのうへ」以下であるとも見うるのではなかろうか。かりにここに、このような見かたを可能とみとめ、こころみにそういう線の解釈をとることとして、この「あやしう……」の一文に対し、

A 「よからず思ひける」の主語および対象、「え知りはべらぬ」の主語は、それぞれになにであるか、「しりうごと」はだれに関するかげ口であるか、これらの点を、必要にしてかつそれだけで十分な、そのような形で補いつつ、

B 「おほうきこえはべりし」を係結びの助詞の呼応なしで余情をこめた表現としての連体形の終止とみなさないで、むしろその下に位置すべき名詞を略した連体形の用法をここに擬しつつ、

C 「よからず思ひける」を「え知りはべらぬ」の動詞「知る」の目的と解し、

D 「え知りはべらぬ」の連体形と「おほうきこえはべりし」の連体形との関係は、英語などの文法でいう同格の関係にあたるものと解して、この一文のあらたな通釈をほどこせ。（通釈文は、現代の標準的な口語文により、これをこの問題用紙の末に設けたわく（一〇〇字分の原稿紙省略）の中に書くこと。）

設問の二　日本語の形容詞には、動詞の未然形（将然形）に「し」の語尾が付いてできているものがある（たとえば「よろこぶ」から「よろこばし」へのように）。さて、そういう風な造語法によって形容詞が派生する、そのもととなりうる動詞が、右の問題文のなかにじっさいにふくまれている。以上の指示にもとづき、問題文のなかのその動詞から派生すべき形容詞（二語）がなんであるかを考え、それらを次の文の空白の部分（三字分のわく）のなかに、平がなでしかるべく書きいれよ。

「うちはへて□□□しくのみ思ひみだるるは、いみじうかひなきわざになむ。あはれかの人のいとど□□□しきを」などうれへのたまふ、御年よりねびさせたまひていとをかしうこそ。

注 うちはへて＝たえまなく。　うれへのたまふ＝ぐちをおこぼしになる、愁訴なさる。　ねびさせたまひて＝ませておいでになって。

管見の限りでは亀井が紫式部日記に言及した論考は見当た

らず、こうした形で新たな解釈可能性を提示しているのは資料的にも珍しい。本稿では個々の設問についての言及は避けるが、一次、二次試験という新入試への亀井の意気込みが感じられるような出題であるとともに、現在大学入学共通テストなどでしきりに試されるようになってきた、いわゆる「複数テキスト」の問題をこの時代に試みていたという先見性は注目すべきであり、詳細については稿を改めたい。

更に大問二もそれに続く形の展開で、亀井自身が出題意図を語っている。

大問二

かつて「社会」のある課目の試験を担当しているN君がわたくしに言った。問題文の日本語がわかつていない答案のあるのにはおどろきましたよ。わたくしは言った。「国語」では設問の文章も問題の一部と考えて出題しています。ことしの第一問についていえば、わたくしは受験生をあい手にとつて紫式部日記のある特定の個所がどうのこうのといっているつもりなんかない。問題はまず設問に対するその意味の的格な把握だ。設問の表現が晦渋であるとのそしりはもとより歓受する、カイジユーということばが、〝論理的〟の反対語でないかぎり出題の趣志は明鮮なつもりである。くりかえしていうが、わたくしは、受験者自身の、論理的な思考にささえられた、その理解力を、まず前提として要求しているのである。

Ⅰ　右の本文の中に、漢字を誤つて用いている漢語がある。それらを、つぎの「例」のような形で、指定の個所〔この問題用紙の末（省略）〕に書きだせ。

例

課目×……科目○

Ⅱ「問題はまず設問に対する……」における「問題は」とは、どういう意味か。それをほかのことばで言いかえて、左の余白に示せ。できれば、本文の言いかえにそのまま使える表現が望ましいが、その点、かならずしもぴたりとすわらない言い方でもよい。）

Ⅲ　本文に筆を加え、そのある部分をとつて、それを「平安文学の専門家に擬して」と、書きかえたと仮定する。そのとりあげた部分はどこであるか、本文について、その部分を□のわくでかこんで示せ。

Ⅳ　最後のところに「くりかえしていうが……」とある。ここに「くりかえ」されている内容に、すなわち、ここに言つてあるところのことに、照応する部分が、前の方にあるはずである。それがどの部分であるか、

本文について、その部分を□のわくでかこんで示せ。

この年度[8]の『全国大学入試問題正解』に「こぼれ話」なるコーナーがあり、「出題者まかりとおる」というコラムを掲載し、ここ数年の入試問題についてまとまった形でその流れを総括している。

毛色の変わった問題のある中でも、例年ひときわ目立つ横綱格ともっぱら評判なのが一橋大。というのも、毎年必ず入試自体を扱った文章を出題しているからで、それがこの三年、正・反・合と弁証法よろしく続いているのだからおもしろい。まず、三六年は「昭和三十五年度大学入試問題所見集」が登場、「各大学の出題傾向には、まだまだ程度が高すぎたり、指導要領の範囲外のものがある。」という全国高校長協会の発表をとりあげた。明けて翌年、今度はシテが変わって出題者の側から、「秋耕堂未刊落書帳」なる名で、問題作成の苦心の一くさり。「受験地獄の交通整理の片ぼうをかつがされてクサクサしている」筆者は、「日本語に日本語でこたえる国語の試験で、りくつはぬきに、いったい何が要求できるというのだ。」と入試の本質に疑問をなげかけた。ところが、一年間の熟慮のすえか、三八年は、一・二次に共通して出題した「紫式部日記」の出題意図について、「わたくしは、受験者自身の、論理的な思考にささえられた、その理解力を、まず前提として要求している。」と一応の結論が出た。まさに連載小説ならぬ連載入試傾向問題で興味津々。さて来年は？

このコラムが亀井の目に触れたのかどうか知る術はない。けれども、この年を最後に一橋大学の入試問題にかかわる迷走は一旦終止符を打つ。一橋大学国語全体の傾向としてはやはり難問と評すべき出題が続いたが、少なくとも入試問題自体が受験生以外の誰かに向けられたメッセージを含意していたり、出題者の「いたずら」が反映していたりするような問題は完全に姿を消した。亀井自身がこうしたやり取りに疲れてしまったのか、作問の協力者を得て問題から毒が除かれたのか、いずれにしてもこの年を以て波瀾万丈の第二期が終了したと考えられる。

前掲の『田中克彦自伝』にそれを裏付ける記述がある。

亀井先生はあまりもの悪評に耐えかねて、とうとう、学習院に出かけていき、文学部長に頼み込んで梅谷（文

夫）をもらってきたんだよというお話しだった。梅谷さんは前歯が一本欠けているような感じを除けば、すべてが円満な方だった。このところから見ると、亀井先生は強がってはいるけれども、あれで、ずいぶん評判を気になさっているんだなということがわかった。こういう類の人は、気にすれば気にするほど、妙な行動に出てしまうもんだということを、自分にうつして考えてみると、よくわかるのである。

梅谷文夫は、近代文学研究者で一九三〇年生まれ、亀井より二十歳年少である。「梅谷文夫名誉教授年譜」（『一橋論叢』第一一二巻第三号　平成六年（一九九四）九月号）によれば、「昭和三十六年四月　学習院大学一般教養課程非常勤講師（近代文学）兼任」、「昭和三十八年三月　学習院高等科退職。四月、一橋大学講師（社会学部）に採用される」とあり、まさにこの年度を以て一橋大学の国語入試の傾向ががらりと変わったことと符合する。「あまりもの悪評に耐えかね」たのかどうかは分からないけれども、第三期の「真っ当な」出題を鑑みるに田中克彦の回想の通りなのかもしれない。

六　おわりに

亀井孝による一橋大学の国語入試問題を三期に分類し、自らの書き下ろしをしばしば出題していた第二期を概観してみた。ここには、亀井の学問的姿勢や教育的姿勢が顔を覗かせるのに加えて、学界や世間に対するやるせない思いが入り交じった、きわめて人間的な葛藤が見て取れる。亀井は論文集に掲載された学術論文以外にも多くの文章を残しているが、入試問題という正式な署名入りではないものの、亀井自らの手によるものと推察される素材文は、亀井孝を知る上でも貴重な資料となるはずである。

本稿では資料の紹介を中心に展開したため出題の内容についてはほとんど言及してこなかったが、亀井の作問は入試国語史―もしそういうジャンルがあるなら―を考える上でも、現在の入試問題のあり方を見直す上でも示唆に富んだ問題に溢れている。先にも触れた「複数テキスト」の問題や、一次試験と二次試験との連作などは、今後の大学入試の一つのバリエーションになる可能性すらある。あるいは現在、一般選抜においては平準化されて特色のない入試問題ばかりが横行

しているが、近年拡大している総合型選抜入試においてはきわめて多彩でユニークな出題がされるようになってきており、亀井が試みていたような出題が受験生の学力の識別に大きな役割を果たす可能性もある。

入試国語史において、亀井孝の出現は早すぎたゆえに軋轢と酷評に悩まされた、というのは贔屓の引き倒しに過ぎるかもしれないが、少なくとも、あの晦渋で条件の多い設問[9]をもう少しつぶさに分析することで、亀井孝の国語教育についての考え方が発掘できるのではないかと考えている。（続く）

注

（1）「この大学の国語教授に、亀井孝氏という文法の大家がいるので、文法はうるさい」（『大学入試受験コース』「一橋大学　国語」（昭和三四年（一九五九）学習研究社）とあるが、受験雑誌の傾向と対策に大学教員の名が記されることは当時でも珍しかった。

（2）「虚白堂毛利貞斎が四書諺鈔は、江戸時代、ずいぶんと世におこなわれたもので、これに対し、貞斎のことを、いまのことばでいえばガクサンものでもうけている俗物のようにいうこえも、また、いろいろにあった。」（『亀井孝『古典と現代』に寄す』）という物言いに表れているように、亀井は学問や教育のあり方に潔癖で、その狭間にある受験産業の存在を忌避していたきらいがある。

（3）上野英二『佐竹昭広集　第二巻』「解説」（平成二十一年（二〇〇九）岩波書店）に詳しい。

（4）「甲」は必修問題、「乙」は選択問題を示す。

（5）「等量」については、「古文の論理的な解剖と、原文に対する等量な口語訳とは、わけて考えなければならない。たとえば、原文には、主語がないのに、それを補って訳すばあいには、それは、完全に等量な訳ではなく、むしろ、いわゆる意訳の一種である。」（前掲『概説文語文法』）とあるように、自著で術語として用いている。

（6）『言語と文芸』には昭和三十六年度の問題の講評として「入試問題を斬る」という名のコーナーがあったが、この年の一橋大学の「奇問」については論ずるに値せずという評価なのか、一言の言及もない。

（7）『言語　諸言語　倭族語　亀井孝論文集6』所収「HABENT SUA FATA EXEMPLA」に「縁起」とする前書きがあり、「秋耕居ノアルジ　李莽湖」と署名される。初出の、成城大学大学院文学研究科『ヨーロッパ文化研究』（昭和五七年（一九八二）三月）には、「秋耕堂主　李莽湖」とされており、亀井は長らく「秋耕堂」なる寓居を仮託していた。

（8）『言語と文芸』昭和三十八年度、「大学入試問題を見て」には、中馬静男の署名で、「一橋大学は従来難解で聞こえていたが、昨年あたりから今年にかけて、非常にすっきりしてきたことは喜ばしい。一般に書取問題は、現在の高校生にとってにが手なのだが、年々当用漢字のわくに従う傾向が見えてきたことはよろこばしい。」とあるが、書き下ろしの作題や古文の「連作」については全く触れていない。

（9）一橋大学退職後の亀井を成城大学に招聘したことでも知られる山田俊雄の以下の言は、この問題を考える上で示

唆に富む。
世上には亀井孝を饒舌の徒であるかのごとくに、彼の謙遜の辞さへ誤解する向きが存するが、その広長舌そのものが、彼の犀利な分析を客体化するに不可欠なものであることは、もはやあまりにも明白である。物語るべき事実の奇を遺りなく斟み上げて提示する方法が、正しく彼には備はつてゐることを識るべきである。
（山田俊雄『日本語のすがたとこころ　亀井孝論文集4』序）

【解答例】※本文引用順。設問の記号・番号の表記は引用書に従った。

昭和三十一年度（一九五六）大問二
×（乙本の本文）「物くはず酔ひ乱し」なら「ゑひふし」とすべきだから。（以上二六字）

昭和三十一年度（一九五六）　大問三
（イ）何か手みやげにするものがほしかった。
老いると……へたになるらしい。
（ロ）すっきりやりたかった＝気のきいた贈り物をしたかった。つぼを外した＝まのぬけた
（ハ）捨て目を利かす＝さし当ってこれという必要はないが物の価値を見きわめておく。
（ニ）女性

昭和三十二年度（一九五七）　大問二
（イ）対蹠的でくらべようがない。
（ロ）惜しむ　（ハ）かわいい
（ニ）生きている
（ホ）からき恋をもあれはするかも

昭和三十四年度（一九五九）大問三（甲）
Ⅰ　文脈とよみとの相関関係の理論（十四字）
Ⅱ　文脈とよみとの相関関係の理論的成立（十七字）
Ⅲ　外形的な言語の奥の内面的思想感情の流れ（十九字）
Ⅳ　理論的裏づけまでは伴なわない経験的な性質（二十字）
Ⅴ　文脈のよみの深浅を左右するものにはなれがあるが、文脈とよみとの相関関係を理論的に対象とすればその理論は文脈論と呼べる。（五十九字）

昭和三十四年度（一九五九）大問三（乙）
Ⅰ　無常の風に誘われ今冥土へ行こうとしている（二十字）
Ⅱ　まだ娑婆にあって六道には就いていない（十八字）
Ⅲ　希望が極楽へやってもらいたいというのなら（二十字）
Ⅳ　死出の山の鳥をさして閻魔王に馳走するなら（二十

字）

Ⅴ　殺生の罪を犯したものを罰する立場の閻魔王自身がその禁を犯し、また殺生の罪を犯したものを娑婆に帰して殺生を奨励したこと（五十八字）

昭和三十五年度（一九六〇）大問一

（一）半旬　（二）弁解　（三）致命　（四）恥辱

（五）さが　（六）他意　（七）精進　（八）作家行動

（九）金科玉条　（一〇）再三　（一一）展（輾）転

（一二）じきょう　（一三）孤城　（一四）掟　（一五）鉄鎖

（一六）一笑　（一七）未来永劫　（一八）すなお

（一九）鞭　（二〇）評定

昭和三十五年度（一九六〇）大問二（甲）

一、虹の出現によって古代人は自然への畏怖や妖幻の美ともいうべき感覚的幻想にうちまかされたろうという前文をいったん打ち消して、同様に現代人も太古そのままの澄明な自然をいろどる虹を見た場合は、反近代的な原始的な幻想に誘いこまれるであろうという後文をいいおこす役割。

「いな」に照応することば＝「とはいえ」

※『シグマベスト解明新現代文』解答例

一、古代人が虹に対して恐怖を感じたという前文の不完全さを修正し、現代人もまた太古そのままの自然の中に出現する虹に対しては異様な幻想を感じるだろうという、真に述べようとする後文を起こす役割。

「いな」に照応することば＝「むしろ」

二、虹の出現において

三、なつている

四、〔前者〕忽然として山峡をつないだ巨大な虹を眼前に見たという視覚的・客観的な一瞬。

〔後者〕あとさきの時間が消えてしまって汎神論的な自然の美に魂を奪われたという主体的・心理的な一瞬。

五、第一は、近代的な都会の虹のおこす反応で、季節感をそそる淡い感傷といった近代的情緒をよびおこされること。第二は、太古そのままの澄明な自然をいろどる山野の虹のおこす反応で、近代的な生活感情から解放され、古代的・汎神論的な異様な感覚的幻想に誘いこまれること。

六、古代人は自然と人間との未分化な汎神論的自然のうちに生き、自然の神秘にうちまかされてしまって、これを対象化し客観化するという態度が確立していなかったゆ

え、古代和歌においても、自然を近代人のように情緒的・唯美的に表現するという試みがなされておらず、身近かな自然を生活や人事に結びつけてよむ場合が多いというように題材も局限され、神秘にみちた雄大な自然が詠まれていないという特徴がある。

※『シグマベスト解明新現代文』解答例

六、古代の人間は、自然から独立して自己の主体性を確立することができず、したがって自然を対象化し、それを美的に観照することもできず、したがって虹という自然現象に対しても、神秘的な畏怖を覚え、そこに不吉の前兆を甘受するだけで、それを詩歌文学の素材にすることができなかった。そのような汎神論的な自然観を基盤としていることが、古代和歌の文学としての特徴であり、同時に限界でもあった。

昭和三十六年度（一九六一）　大問一

一、（1）協会　（2）検討　（3）発表　（4）傾向　（5）改善　（6）指導要領　（7）範囲

二、せし　せり

三、学習シドウヨウリョウのハンイ外の出題があったりしている。

昭和三十七年度（一九六一）　大問三

一、入学試験が近づいたいまになっても、まだ国語考査法のこんなことを言ってぐちをこぼしているようでは、憂うつな気分になるのも当然のことである。さていつまでもこんなくさくさした気分になっているのではたまらないと思い、いささか憂うつの厄ばらいにでもなるならばさいわいというようなつもりで、さてこそ黙していわなければかえっていけなかろうと、こんな生意気な言いぶんを、ごたごたとならべたて、大学の恒例の年中行事の一つである入学試験答案の採点という厄介な役目が廻ってくるまでは、なにはともあれこちらは幸福、厄介者はこないよう、「福は内、鬼は外」の声のきこえてくる節分の夜、こうしてこの一文を書く次第である。（以上二九五字）

二、（Ⅰ）7（Ⅱ）10

三、（Ⅰ）またこの出題形式はそれ相応に

（Ⅱ）あかごのときからせっせとおぼえて蓄積した単語の力をためすのはよいとしても、その単語の力とは別に、さらにそのうえにためしてみるものとして、という意味内容をもっている。

（Ⅲ）記憶力をためすという出題の形式は、その出題の形式そのものとしては、かならずしも不適当なものではないという意味をとくに印象づけようと意図した。

（Ⅳ）古語に現代語でこたえるというようなばあい。

（Ⅴ）（順に）平賀源　福　鬼外

昭和三十八年度（一九六三）第一次試験　大問二

問一　1　イ　2　ロ　3　イ　4　イ　5　ホ

問二　ホ

問三　A　れ　B　る　C　る　D　る

問四　a　ハ　b　ロ　c　ハ　d　ロ

問五　イ

昭和三十八年度（一九六三）第二次試験　大問一

一、この女は、他人がなぜだかむやみにこの人をきらいに思ったのも、本人はいっこうに気づかないし、この人についての不愉快なかげ口がたくさん私の耳にはいった、そういう人でした。（八三字）

二、つつま　おもは

昭和三十八年度（一九六三）第二次試験　大問二

Ⅰ　的格×→的確○　晦重×→晦渋○　歓受×→甘受○　趣志×→趣旨○　明鮮×→明解○

Ⅱ　かんじんな要求点

Ⅱ　（かこむ部分）受験生をあい手にとつて

Ⅳ　（かこむ部分）まず設問に対するその意味の的確な把握だ。

（にしむら・じゅんきち　佼成学園女子中学高等学校教諭／成城大学非常勤講師）